
恋姫転生学園

五月晴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫転生學園

【Nコード】

N2058I

【作者名】

五月晴

【あらすじ】

月詠学院に交歓学生として通っていた2人の少年が、学校側に自分達の能力を知られたその日の夜。

神社で出会った少女に導かれ、自分達は何なのかという質問に答えるために異世界への扉を開く。

2人が見つける答えは何なのか。

そして少女が求めるものは何なのか。

序章（前書き）

五月晴です。

二振りの刀と似ているような似ていないような設定で書きますことを報告いたします。

この物語は真・恋姫と転生學園のクロスものになります。

史実の三国志を完全に無視した形になりますので、嫌悪感を持たれる方は移動なさって下さい。

それでもいいという方はどうぞ、お楽しみ下さい。
では。

序章

恋姫転生學園

序章

神社の賽銭箱の上で割れた鏡を抱いた少女が月を見ながら呟く。

「お兄ちゃんたちは『何』なの？『神子』なの？それとも『天の御遣い』なの？」

チャイムが鳴ってしばらく経った後、廊下にくつもの足音が響き渡り不意に図書室のドアを開けて3人の少年たちが入ってきた。司書の先生に軽く会釈した少年たちはそれぞれ机に鞆を置くと本棚の方へ向かった。

初めに戻ってきた少年の手には『三国志』に関する書物が3冊。次に戻ってきた少年の手には『天照郷』に関する書物が2冊。最後に戻ってきた少年の手には雑誌が…。

「『及川っ！』」

雑誌を持って来た少年は他の2人に怒鳴られてすぐさま引き返し日本の歴史に関する書物を持って来た。

「理事長の阿呆な企みさえなければ、今頃合コンでウハウハやったの…」

「最初だけだろ？」

「何人に振られれば気が済むんだ？お前こっちに来てから評判…京羅樹先生の学生時代並に評判が悪いぞ。及川」

「嘘や！？」

眼鏡を掛けた少年は図書室の床の上でがっくりと肩を落とした。止めを指した茶色掛かった黒髪の少年に左耳にカフスをした灰色掛かった黒髪の少年が問い掛ける。

「京羅樹先生って確かSGコースの先生だっけか…。仁科先輩が行っているクラスだったよな。エリート…」

「SGコースの女子は半端無い可愛さや」

「そしてガードが高い。お前全敗だろうが」

またも眼鏡の少年はがっくりと肩を落とし、今度は体育座りとなり落ち込んで床に「の」の字を書き始めた。

「駄目だぜ、一刀。それ禁句」

「ごめーん。ついツツコミたくなった」

そんな会話をしながら少年達は鞆からノートを取り出し書き取る用意をした後に本を開いた。

「それにしても歴史上の偉人のレポートを提出って良く考えてみると見るほうは面倒だね」

「1人1人違うからな」。俺と一刀ですでに違うし」

「俺は歴史上の偉人といったら…劉備かな」

「俺は断然！伊波先輩と草凪先輩かな」

「先輩達、まだ死んでないからな…晴人」

「歴史上の人物だろ？ほら、ここに名前が…」

「なんで!?!」

黒髪の少年が持つて来た書物には先程上げた先輩の名前がしっかりと書き連ねてあった。

「伊波先輩は行方知れずやけど、草凪先輩は同じSGコース出身の先輩とラブラブ同棲生活を都内で送っているらしいで。しかも噂によれば相手は学生時代物凄いツンデレだったそうや」

「復活早っ!」

「そして意外な情報を持っている!」

「ワイの情報網は半端やないで」

胸を張る眼鏡の少年の姿が気に喰わなかったのか、何度も叩き潰してきた少年が口を開く。

「そういう情報を無闇やたらに口外するから、女子から嫌われるんじゃないか？口が軽いつて…」

「NO!!」

「一刀……」

『貴方達、静かにしなさい!!』

「すみませーん」

司書の先生の堪忍袋もさすがに耐え切れなかった模様。拡声器を使つて怒鳴られた3人を見てくすくすと笑うほかの生徒達の声が聞こえてきた。

肩をすくめた2人と頭を抱えていた眼鏡の少年は机に向かい3人で雑談しながら、ノートに書きたいことの情報を書き記していった。それからしばらくした後、校内放送のチャイムが鳴り……

『あー2年の学年主任やつとる御神や……2年B組の朝倉と北郷……至急職員室に來いや……ちやうな。あーと……面倒やから、はよ來い。以上……』

図書室で調べ物をしていた3人に加え、司書の先生、他の生徒達も放送が流れた瞬間には会話を止めて聞き入り終わった後固まった。

「校内放送で、こんなアリなん？」

「いや、高確率でアウトだろ」

「俺らなんかやったっけ？一刀……」

「さあーな。及川の行為が激しすぎて女子生徒からの苦情が殺到し

て、天照郷へ交歓学生返還だったりして」

「なんでやねん!!」

一通り話し終わったところで、放送で呼ばれた少年たちが立ち上がった。

「今日はこれまでやな。本はワイが片しとくから、行ってくるといわ。待ち合わせは満腹ラーメンで」

「了解」

「ほな、またな」

「後でな。及川」

2人の少年は鞆を持って図書室から出て行った。

校内を職員室へ向かっている途中の廊下で、少年の1人が呟いた。

「午後17：12つと。……一刀、おかしくないか？誰もいないぜ」

「閉校ぎりぎりまで売店にいるはずの木ノ下さんもいなかったし、なんかねえ……」

少年2人は背中を合わせ鞆からそれぞれ木製の小太刀を取り出した。

校内にひんやりした霧が出てくる。そして廊下の遙か先に黒い影が

見えてきた。

「天魔：か」

「せっかく学生生活っていう青春を満喫していたのに。最初からばれていたんだろっな、爺さんやこの理事長達にはさ」

茶色掛かった黒髪の少年は溜め息をひとつ吐いて肩を竦める。

「せっかく、友達が出来たのに、また孤独になるのか？一刀」

「今度はどうだろうね」

「いつそのこと2人で逃げるか？」

「それもひとつの選択だろうね」

「でもまずは！」

鋭い爪を振り下ろしてきた天魔という存在の攻撃を避ける2人。避けた後に、一刀は突きの構えで天魔の喉元を狙う。それに反応した天魔の腕を晴人が蹴り飛ばす。一刀の攻撃は見事天魔の喉に深々と突き刺さり、黒くどろりとした液体が吹き出る。

一刀たちはその液体を浴びないように離れる。晴人は手に持っていた木製の小太刀を一刀に渡すと、ボクシングの構えを取って2体目の天魔に殴りかかった。一刀は晴人を援護するように動く。

晴人が天魔の横を通り過ぎて、丁度一刀と天魔を挟む形となり2人は視線を交わした。一呼吸を措いた2人は同時に天魔に襲い掛かる。

『乱撃炎舞刹』

天魔の背面から晴人の怒涛のラッシュ攻撃。天魔の正面からは一刀の斬撃。武器が木製のためここでは打撃といったほうが正しいかもしれない。2人の攻撃が全て終わった後に残ったのは天魔の肉塊だけだった。

なおも2人を取り囲む天魔。

晴人が身体の正面で印を組んで目を閉じる。

「凍れ」

一瞬だけ一刀の目には晴人に取り憑く何かを見ることができた。ただしホンの一瞬だけ。

2人を囲んでいた天魔は全て氷の結晶に包まれ……砕けた。

晴人は肩を鳴らして伸びをする。

「出すと疲れるんだよな、『アイツ』」

「同感だね。少しだけ力を借りただけでこの疲労感。割に合わないよ……」

「先生たち、絶対モニターで確認していたはずだし、逃げるぞ」

「賛成」

晴人の提案に、一刀は諸手を挙げて同意した。放り捨てた鞆を拾い上げ2人は下駄箱に向けて走り出す。

「明日、生徒指導室は確定だな」

「下手したら、SGコース行きだろ」

「サボるか？」

「それも賛成！及川も誘おう」

日が暮れて暗くなった校外を駆ける2人の少年の背中を見る1人の女性と2人の男性がいた。

2人の男の内の1人、淡いピンクのジャケットに赤いシャツを着た青年が残りの2人に向かってしゃべり出す。

「帰ってもうたな。……残念やったな、ラギー」

「Ah？」

「この調子やと、明日はサボタージユ確定や。ヒメも早まったな」

「うるさいわね」

「しかし、験力を一瞬だけ発動させたのは分かったけど、あの威力は反則や。あの一瞬だけで飛河を超えておった」

「……………」

「それに、『また孤独に』か。巻き込むのを躊躇う言葉やな」

今はもう見えなくなった2人に語り掛けるような言葉遣いをした青年の呟きは夜の暗闇に溶けて消えた。

2人の少年は学校から逃げ出して近くにある赤坂神社に来ていた。ここは都内にあるにも拘らず木々に囲まれ静かに過ごすことができ数少ない場所だった。ただ、ここに住んでいる少女とはあまり遭遇したくないのが2人の心境。声を掛けてこないのはいいが、ずっと見ているからだ。少女の方を見ると必ず目が合う。おいでおいでされたら、黄泉の世界にでも連れて行かれるのではないかと心配するほどに。

「今日は……っと。いないみたいだな」

「さすがに、19時を過ぎていたらいないよ」

「いたら逆に怖いな」

「同感」

一刀と晴人は笑って神社の賽銭箱に座った。かなり罰当たりではあるが自分達にも神さまが憑いている為、あまりそういうことは気にしない。

「あっ」

「どうした、一刀？」

「及川、忘れてた」

一刀は急いで鞆から携帯を取り出す。そして画面を確認するが…

「あいつ……合コン行きやがった」

「丁度いいんじゃないね。これから満腹に行っても食べる気がしねーし」

「まっ、そうだな」

一刀は携帯を制服の胸ポケットに入れる。
2人はそのまま空を見上げて星を眺める。

「神子なんて誰がなりたいと思うんだろうな」

「晴人の好きな先輩たちは皆、『神子』だろう？晴人は嫌なのか」

「俺はなりたくない」

「そっか……。と言いつつ俺も嫌だ」

2人の脳裏に浮かぶのは幼少の頃の孤独だ。家の一室に閉じ込められて、友達の1人も作ることが許されなかった孤独の幼少期の記憶。験力が発動しても隠し続けた結果、外に出ることが許され2人は出会った。

それ以来の幼馴染。

それ以来の親友。

そして……

「ねえ、『ハル兄』……これからどうする？」

「久しぶりだな……その呼び方」

「別にいいだろ。今日くらいは……嫌なこと思い出したわけだし」

「とりあえず、補導されなくらいで遊ぶか」

「いえーい」

2人は鞆を肩に掛け、街の方に向かおうと階段の方に足を向ける。
が…

「ねえ……」

「ん？」

2人が振り返った先にいたのは、遭遇したくないといっていた少女……ではないが、この時間帯にこの場所にいることは似つかわしくない少女がいた。その手には鏡が抱えられており、怪しい光を放っている。

「えーと、お嬢ちゃん。お兄さんたちになんか用？」

「神子じゃないなら、貴方達は『何』？」

「えっ？」

「見せて。貴方達は何なのかを、私が送るこの管理された世界で」

少女が持っていた鏡に亀裂が入る。

光が一瞬だけ治まり、次の瞬間2人は光の濁流に飲まれていた。
神社に残ったのは、割れた鏡を抱えた少女のみ。

「教えてよ……お兄ちゃんたちは『何』なの？『神子』なの？それとも『天の御遣い』なの？」

少女の眩きは闇に掻き消された。

序章（後書き）

さて、2人をどこにやるうか。
蜀以外かな…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2058i/>

恋姫転生學園

2010年10月9日13時04分発行